K. E. Weick の組織化理論におけるイナクトメント過程へのアプローチ

星　井　進　介

Abstract

K. E. Weick advocated understanding the organization phenomenon from the viewpoint of organizing in “The Social Psychology of Organizing”. He showed the concept of enactment in organizing theory. Enactment is the only process where organizational members directly engage with an external environment and is the action that produces the raw materials that can then be made sensible. Weick described that the enactment perspective implies that people in organizations should be more self-conscious about and spend more time reflecting on the actual things they do. Thus, enactment is an important element of the organizing process. The author considers that a discussion of the enactment concept is necessary in the case of the observation and analysis of the organization phenomenon. The aim of this study is to examine the enactment concept from the action and interaction perspectives. For this purpose, Parsons’ notion of the “double contingency”, Silverman’s “action frame of reference”, Blumer’s “joint act”, Schutz’s “intersubjectivity”, and Wiley’s analytical frame of the social system were investigated. In this way, the relationship between enactment and interaction in the organizing process was clarified.

キーワード……K. E. Weick　組織化　イナクトメント　相互作用　間主観性

1　はじめに

組織研究者 Karl E. Weick は、組織が存続する条件として安定性と柔軟性のバランスの維持を挙げている(Weick 1979：280)。安定性は一時的な変化に対処するために有効な手段である。組織が対峙する世界には規則性というものが存在し、組織に蓄積された記憶と知識、反復能力があれば、その規則性を活用できる。しかし、慢性的な安定性・保守性は逆機能的に働く恐れがある。組織が有する保守性のために、現在よりももっと有効な方法があるにもかかわらず、それが見出されないかもしれないし、組織を取り巻く新しい環境変化に気づくことができないかもしれない。一方、柔軟性は一過性ではない環境変化に適応するための現状修正や新しい試みの創出のために必要である。しかし、完全な柔軟性は組織のアイデンティティや継続性を保持

できないという側面を持っている。どのような社会的組織も、自らの歴史や、何をやってきたのか、そして何を繰り返してきたのかによって自らを定義するものであり、慢性的な柔軟性はアイデンティティを破壊する。このように、一般に外部環境に対して組織が保守的な行動を示す傾向にあることを指摘する一方で、常に柔軟である組織が優れているとは限らないことも併せて示している。

このような考えをもつ Weick は､組織化という視点から組織活動の本質をとらえようとする。組織現象は組織メンバーの絶え間ない相互行為によって構成されており、通常考えられるほど安定的なものではない。Weick(1979)は組織化を“意識的な相互連結行動によって多義性を削減するために妥当だと皆が思う文法”と定義し、その行為プロセスとして、生態学的変化－イナクトメント－淘汰－保持という 4 つの要素からなる組織化過程モデルを示した(図 1)。このモデルは、変異－淘汰－保持という要素からなる進化論の自然淘汰の過程に依拠したものである。

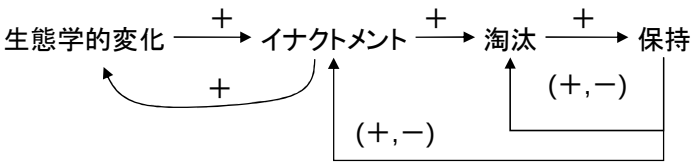

図 1　組織化の 4 つの過程　出所：Weick 1979：172

組織化過程の中心となるのは、上述の図で 4 本の矢印が出入りするイナクトメントである。イナクトメントは自然淘汰モデルにおける変異にあたるものであるが、Weick は、組織活動において自らが直面する環境の一部を自ら生み出しているという事実と、組織メンバーが自らの思考や行動を拘束する環境を創出する上で果たしている積極的な役割を強調してイナクトメントという言葉を用いている(Weick 1979：169；1995：41)。イナクトメントは以後に意味づけられる素材を生み出す行為であり、その例として、言うこと、行うこと、意味の網を張ること、適応すること、それに変異を生み出すといった活動が挙げられる(Weick 1979：190)。『組織化の社会心理学(第 2 版)』では、イナクトメントがもつ現実社会を構築する働きについて次のように述べている(Weick 1979：213-219)。

組織化モデルが依拠するのは行為が認知を規定するという立場であり、組織化に伴って形成される秩序は所与のものとして発見されるというよりも、行為によって構成されてあてがわれるものであるという見解をとる。Weick は “自分が見るだろうディスプレーを創造している組織の行為とは一体何なのか？” と問うているが、その組織の行為はイナクトメントである。イナクトメントが説く観点は、組織の人々は自らが行っていることの実態を強く意識し、その行為についてより深く考えるべきであるという点にある。

例えば、一般的に知識は客体から主体への方向で得られるという前提に立っている。しかし

一方で、知識を獲得することは、主体が客体と相互作用することによって客体を一部分構築する活動であるといった側面もあることが指摘できる。組織における活動においても同様で、客体(環境)と主体(組織メンバー)との間には、刺激が反応を引き起こすといった概念が意味するような一方向の作用ではなく、両者の間における相互の作用がある。組織化モデルにおいてこの相互作用は、イナクトメントと生態学的変化との間の双方向の作用の形で示されている。

イナクトメントは、環境の中から自らが認知すべき対象、意味づけすべき対象を作り出す創発的行為であり、安定的な相互行為体系を構築する契機となる行為である。人や組織を取り巻く環境や現実がイナクトメントという社会的な相互作用を伴う行為によって構成されるという立場に立つと、客観的な実在物としての組織や社会の存在が問われ、客観的かつ絶対的な真理や正義の概念が問われることになる。イナクトメントによって創造された環境においては、真か偽か、正義か否かが問われるのではなく、我々は何をしたか？、これらの行為はどんな意味があるか？といったことを問うことが焦点となるのである。

Barnard(1938)が説いた組織の定義として、“二人以上の人々の意識的に調整された活動や諸力の体系”がある。組織とは人間の活動で構成される一つの体系であり(Barnard 1938：80)、組織として秩序的に構造化されるのは個々の人間ではなく、人々の行為や行動、影響力である(Barnard 1938：86)。そして、二人の間の相互反応を適応的行動から生じる意図と意味に対する一連の応答としてとらえて、この相互作用に特有な要因を「社会的要因」、その関係を「社会的関係」と称している(Barnard 1938：12)[1)]。Weick の組織化理論も同様で、組織化されるのは人々ではなく、人々が織りなす行為や意味形成の取り組みの活動であり、そうした行為の積み重ねの結果、一つの事象に対して多様な解釈が可能である多義性が削減されて組織メンバー同士の共有された意味世界が構築され、組織化が進展していくのである。ここで、行為とは孤立した状態で存立するものではなく、関係の中でしか生起しないものである(西原　1998：171)。周囲の環境への働きかけの行為として表現できるイナクトメントは、相互作用や関係性、間主観性といった考え方でとらえることが可能であろう。これら相互作用などの観点は、特に社会学において重要視され、中心的に取り上げられてきた概念である。以下、第 2 章では行為と相互作用の観点に着目し、Parsons、Silverman らの論述を取り上げ、報告する。続いて第 3 章では、Schutz、Wiley らの論述をもとに間主観性などの概念について検討を行った結果を述べる。

2　行為と相互作用

Strauss(1959)は、人々の間で交わされる相互行為が集団や社会構造の形成に深く関与していることを示し、行為や相互関係、そしてそれらによって構成された集団的産物としての社会に焦点をあてた(Strauss 1959：11)。Strauss によれば、相互行為は複合的で発展的で進展的で流れるようなプロセスをとり(Strauss 1959：70-71)、このプロセスが構造化されて秩序的な統合へと

進んでいく。秩序的な構造は行為者の相互行為によって形成されることから、相互行為をとおして社会構造を見ることができるとしている。「相互行為を行う二人は決してただの人ではなく、集団を表象する者である」(Strauss 1959：88)。相互行為と組織などの社会的構造とは緊密な関係にあり、互いに影響を及ぼし合っているのである。

これまでのことから、Weick 組織理論に関する考察にあたっては行為や相互作用、関係性という事柄が重要な論点として浮かび上がった。これらは社会学において重要な概念として取り上げられている。本章では、社会学の領域から Parsons、Silverman ならびに Blumer の論述を取り上げて、行為と相互作用についての検討を行った。

2-1　ダブル・コンティンジェンシー

機能主義理論を説いた Parsons は、相互行為の過程に含まれる「二重の条件依存性(ダブル・コンティンジェンシー)」と呼ばれる概念を示している。Parsons によれば、相互行為を行う過程では、自己の行為は他者の行為の選択に依存しており、同時に、他者の行為も自己の選択に依存している。すなわち双方のとる行為が、ともに相手の行為に依存していることを意味する。ダブル・コンティンジェンシーとは、相互作用する二人の間で、自己の行為のありようが他者の反応次第でどのようにでも規定される状態、つまり自分と他人の間の二重の双方向的な条件依存関係のことを示している。これは、行為の基本的な特徴として、行為がある状況における特殊な刺激に対して一対一に対応する反応によってのみ成り立つのではなく、自己の行為に伴う他者からの反作用が、自身のさらなる行為の選定に影響を及ぼすことを示している(Parsons 1951：10)。Parsons は相互依存行為について次のように述べている。

> わたくしに開かれているいくつかの選択肢のなかから、何をわたくしが選び取るかに依存して、わたくしの行為に指向している他我自身の選択肢の体系との関連において、他我が反作用するという問題をわたくしは他我に課すであろう(Parsons 1951：104)。

社会体系について Parsons は、複数の個人行為者が少なくとも物的ないし環境的側面を含む状況において、お互いに相互行為をしている事態にほかならない(Parsons 1951：11)として、社会体系を分析する上での単位について、もっとも要素的な意味での単位は、行為であると述べている(Parsons 1951：32)[2)]。Parsons が論じている社会体系は、相互に依存しあっている行為の諸過程として理解される一つの体系であり(Parsons 1951：205)、それは関係的体系とも言い表せる(Parsons 1951：533)。Weick 組織化理論では、組織化を記述する際の分析単位として二重相互作用という依存的反応パターンを用いることが有効とされるが(Weick 1979：115)、この二重相互作用という概念とダブル・コンティンジェンシーとの類似性を指摘できる。Weick によれば、ある人の行動が他者の行動に依存していることを相互作用と呼び、さらに二重相互作用と

は、行為者 A の行為が行為者 B の特定の反応を引き起こし、B の行為が A の反応を喚起することを意味している[3)]。

また Parsons は行為について、行為の準拠枠という概念を用いている。Parsons にとって行為とは、生化学的な刺激－反応で表される概念図式ではなく、「指向」図式を含んでおり(Parsons 1951：533)、一人またはそれ以上の行為者の、他の行為者を含む状況に対する指向を取り扱っているのが行為の準拠枠である(Parsons 1951：9)。ダブル・コンティンジェンシーによって、自分がどのように行為するかは他者次第であり、他者も相手の行為次第で自らの行為を選択する。このような状況でお互いの相互関係が成り立つのは、人々の行為が行為者同士の共有するやり方や体系に従っていて、相手がどのような行為をするのかという予想がつくからである。行為の準拠枠とは、行動のガイドラインとなるような体系を言い表している。

2-2　行為の準拠枠

Silverman は行為の準拠枠の概念を用いて、組織分析への展開を試みた(Silverman 1970)[4)]。Silverman の行為の準拠枠の主張は、Schutz の現象学的社会学や Blumer のシンボリック相互作用論などをルーツとするものであり(加護野 1988：29)、主観的で解釈主義的な分析視座を組織理論に導入しようとした。Silverman は、社会的現実が社会的に構成され、維持され、変化されるものという考えをよりどころにしており、組織現象の分析においては、社会的行為者としての人間を観察対象の中心においている(Burrell and Morgan 1979：239-240)。

Silverman は、「もしシステムが存続するのであれば共通の価値が広く浸透していなければならない」(Burrell and Morgan 1979：242)と述べ、社会的事象の秩序へ向かう傾向を強調している。そして、その際に行為者によって交わされる意味の理解を中心概念とする組織論を行為の準拠枠と呼び、行為者が行為に付与する主観的な意味を理解することを議論の焦点とした(加護野 1988：29-30, 39)。行為の準拠枠に関する Silverman の主張は、以下の 7 つの命題にまとめられている(加護野 1988：29)。

1. 社会科学と自然科学はまったく異なった秩序をもつ対象を取り扱っている。両者とも、厳密な規準をもつと同時に、懐疑の対象ともなるという意味で共通点をもつが、両者の視点が同一だと期待してはならない。
2. 社会学は行為の観察ではなく、行為の理解にかかわる。行為は社会的現実を規定する意味から派生する。
3. 意味は人々によって社会に対して与えられるものである。共有化された志向は制度化され、後の世代によって社会的な現実として経験される。
4. 社会は人間を規定するが、人間もまた社会を規定する。ある一定の意味世界は継続的な日常行為によってのみ維持される。

5. 相互作用を通じて、人々は意味を修正・変更・変換する。
6. 人間行為の理解のためには、関与者が行為に対して付与した意味を説明しなければならない。日常の生活が社会的に創り出されたものであるにもかかわらず、人々がそれを現実的で常軌的なものとして知覚する方法が、社会学的な分析の主要な関心事となる。
7. 行為が、外的制約的な社会的・非社会的な諸力によって決定されると主張する実証的説明は許容できない。

Silverman が説く行為の準拠枠は、人の行為を組織構造や組織過程、管理システムに対する反応としてとらえる視点を否定し、社会科学の基本的課題は組織という社会的事象における行為の意味連関を理解することにあると主張する(加護野 1988：29-30)。組織のなかの社会関係は行為者の相互行為から生み出されるのであり、行為の準拠枠では、組織の現実を理解する際に、ある特定の管理者の視点からみた一方的な解釈や説明によるのではなく、行為者の視点からより正確に理解することを目指している(加護野 1988：33-35)。この分析視座は、組織をいかにうまく運営するかというよりも、現実の組織で何が起こっているのか、それを行為者の視点で見るとどうなるのか、という点に関心をもっており、組織における行為者が組織の現実にいかなる意味を与えるかを理解することに焦点をおいている(加護野 1988：36, 41)。

Weick は、行為者の活動を規定し、方向づけるものとして、イナクトされた環境という概念を提示している。イナクトされた環境とは、イナクトメントによって創造された環境であり、それまでの多義的であった状況を, 有効な適応関係をもつ因果の連鎖として表したものである。人々は新しい解釈や行為を、既に自分たちが経験し、知っており、有効だったもの、すなわちイナクトされた環境への適応によって理解して意味づけようとするのである(Weick 1979：229)。

2-3　連携的行為

Blumer は個人と社会の関係を論じるにあたって、3 つの前提条件に立脚したシンボリック相互作用論と称する方法論を展開した。その前提条件とは次のとおりである(Blumer 1969：2)。

1. 人間は、ものごとが自分に対してもつ意味にのっとって、そのものごとに対して行為する。
2. このようなものごとの意味は、個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導き出され、発生する。
3. このような意味は、個人が自分の出会ったものごとに対処するなかで、その個人が用いる解釈の過程によって扱われたり、修正されたりする。

シンボリック相互作用論とは、「シンボルを通じての人間の相互作用過程に焦点を置き、人間

の社会による形成と社会の人間による形成という問題、つまり、人間と社会との関係についての基本的問題を明らかにしようとするものである」(船津 1976：1)。ここでシンボリックな相互作用とは、人々がお互いの身振りを解釈し、その解釈によって生み出された意味にのっとって行為することを指しており、それは形成的な過程であり、進行する過程であり、相互作用によってお互いの行為が解釈され定義される過程を意味している(Blumer 1969：84-86)。

Blumer にとって人間集団や社会とは行為の中に存在するものであり、集団を構成する人々の相互作用を前提としている。そして、「構造または組織を示しているのは、この活動の複合体なのである」(Blumer 1969：8)と述べて、社会や組織が人々の行為や活動からなるものであるという視点を明示している。Blumer は、「各個人が行動の方向を適合させることから成り立つ、行為のいっそう大きな集合的形態」のことを「連携的な行為」と称している(Blumer 1969：90)。広く社会活動を観察すれば、連携的行為とそれらの結びつきによって人間の社会や集団は構成されており、連携的行為とは社会の基本単位といえるのである(Blumer 1969：90)。連携的行為は、その生成の過程で相互の関連性を増して一体となっていき、単に二人の行為を足し合わせた以上のものを意味するようになる(Blumer 1969：142)。Blumer は次のように述べている。

> 社会とは、自分たちの生活条件から自分たちにのしかかってくる多種多様な状況に対して、人々が直面していくことである。こういう状況に対して人々は、連携的な行為を編み出すことで対処していく。連携的な行為において、人々は、お互いの行為をうまく配列しなくてはならない。連携的な行為への参加者は、他者の行為を解釈し、また逆に、他者に対して自分たちがどう行為するかの指示を出すことによって、このことを行う。このような解釈と定義の過程によって、連携的な行為が組み上げられていく(Blumer 1969:93)。

この連携的行為の特性として、行為者同士の価値基準の共有という観点をもたず、互いの共通目的の達成を目指すものでもないという点を挙げることができる(Blumer 1969：98-99)。連携的行為の参加者は、お互いの行為を組み上げて秩序ある行為体系を作り出すのだが、それは二人の妥協の結果ということもあれば、強制の結果ということもある。また、熟考の結果による最善の策にもとづく場合もあれば、他にやり方がなく仕方がないからという場合もある。「ごく大雑把にみるならば、社会とは、うまくいく関係を形成するもの」(Blumer 1969：99)であり、このような連携的行為をもとにして事象を解釈し、意味を与えていく視点を Blumer は示している。これは、Weick 組織化理論の重要な点として挙げられている「人々は最初手段について収斂するのであって目的についてではない」(Weick 1979：117)ということと同様の観点である。Weick によれば、まず行為者は共通手段について収斂して相互連結行動を行うようになり、安定した行動連鎖が繰り返し行われることによって秩序だった構造が形成されるようになる。そして、相互連結行動によって行為者間での共通の手段が確立された後になって事後的に意味が

形成され(回顧的意味形成)、行為者相互の共通の目的へとシフトしていくと述べている。「行為というものは、いくつかの理由のどれででも行われ、その行為が完結した後になってはじめて、行為者はその行為をふり返り、そしてどんな決定が下されたのか、どんな意図がそこにはあったのかを知ることができる」(Weick 1979：120)のである。

また Blumer は、行為者は他者と連携的な行為をするだけでなく、自分とも相互作用をすることを指摘している(Blumer 1969：144)。これは、連携的行為に先立つ前段階としての自己内省的相互作用と呼べるものである。「他者を意識するとき、その行為を解釈し判断するとき、そしてその他者を一定のやり方で特定化するとき」(Blumer 1969：144)、人は自分に対して指示を送り、相互作用を行っている。そして、人がある事象に対して、ただ単に反応するのではなく、それに気を配り、配慮することができるのは、自分自身に対して指示を出すという相互作用を行っているからだと述べている。この自己内省的相互作用行為は、Weick が説く組織化過程におけるイナクトメントに相当するものであろう。外部で起こった変化や事象、他者の存在に対して、気づきと囲い込みを行うというイナクトメント行為は、行為者自身の主観的で内省的なものであり、それを端緒として他者との相互作用に及ぶきっかけとなるものである。それは事象に対する単なる反応(react)ではなく、自ら働きかけを行う能動的な意味をもった想造・実現的行為(enact)なのである。

3　間主観性概念について

浜渦(1995：4)によると、「「間主観性」とは、「主観」と「主観」との＜間＞にあって、「客観」を基にしても、「主観」を基にしても、その本質を捉え損なってしまうような「現象」を名づけたものにほかならない。それは、主観主義と客観主義という二つの陥穽のあいだを縫って、事象そのものを捉えようとするためのキーワード」と言えるものである。間主観性という概念は、他者理解の問題に取り組むにあたっての Schutz の現象学的社会学の中心的概念である。Weick は、イナクトされた環境という概念が Schutz の考えにもとづくものと述べるなど(Weick 1969：124)、組織化理論の構築に際して Schutz の現象学的社会学から大きな影響を受けていることを明らかにしている。間主観性という考え方は、Weick の著書『組織化の心理学』(Weick 1969)と『組織化の社会心理学(第 2 版)』(Weick 1979)には用いられていないが、『センスメーキング イン オーガニゼーションズ』(Weick 1995)では、組織化の定義の中に間主観性という言葉が使用されるなど、重要な位置を占めるようになる。Weick が用いている間主観性概念は、Wiley(1988)にもとづくものである。

そこで、本章では Schutz ならびに Wiley が説く間主観性概念について考察を行った。そして、Weick 組織化理論との関連性をふまえて、組織化過程の仮説モデル構築を試みた。

3-1　Schutz の現象学的社会学における間主観性

Schutz の現象学的社会学は、Husserl の現象学の影響を受けて成立している[5)]。Schutz は、関係の過程及び相互行為の連鎖自体のなかに新たな意味が創り出されることにもとづいて、日常体験、日常的な相互行為、ならびにそれらによる秩序の達成という観点に着目している(西原 1998：188)。

Schutz の生前に出版された唯一の著作『社会的世界の意味構成』(Schutz 1932)では、第 2 章で現象学的方法に基づく単独の自我の意味構成の過程分析を行っている。この分析は、意識の現象学的に還元された領域内部で行われるものであり、自然的世界を括弧で括ること、遮断すること、徹底的な態度変更(エポケー)の行使を前提とするものであった(Schutz 1932：59-60)。この第 2 章の部分は、現象学的還元を用いて分析を行っている唯一の箇所である。現象学的方法を用いた考察を終え、次に Schutz は他我の解釈という本来の社会的な意味の領域に関心を向けることを宣言する(Schutz 1932：133)。しかし Schutz は次のように述べ、厳密な意味での現象学的還元に基づく分析を放棄している。

> そこで今度は一般に「他者理解」といわれる、社会的世界における特殊な意味付与に目を向けよう。単独の自我の分析から社会的世界の分析へと考察を移すに伴い、単独の精神生活における意味現象の分析の際に用いた厳密な現象学的方法を脇に置き、代わりに人々のなかで日常生活を送ったり社会科学に携わる際に習慣となっている素朴で自然的なものの見方で社会的世界の存在を理解する。と同時に、自我の意識のなかで他我がいかに構成されるかという固有の超越論的・現象学的な問題に立ち入ることを一切断念する(Schutz 1932：135)。

Schutz(1932)訳者の佐藤は同書の「解説とあとがき」で、「彼の他者理解の中心にある自我は、「日常的な自我」であって、フッサールの意味における超越論的自我ではない」と指摘している(Schutz 1932：383)。Schutz は、日常的な社会生活では現象学的に還元された領域における構成現象をほとんど問題にしないという立場に立ち、他者行為の意味構成とその理解、社会的世界の構造分析においては、超越論的主観性と超越論的間主観性の問題性については意識的に断念し、Schutz 自身が自然的態度の構成現象学と称する考え方を展開した(Schutz 1932：60)。

現象学的還元、自然的態度、超越論的主観性は現象学における主要概念である。これらについて山口(1982)は以下のように述べている。

> 自然的態度というのは人間が日常生活のなかで周囲の世界や事物に対してごく素朴にふるまっている態度のことをいう。それは周囲の世界や事物がそこにあるということを何ら疑わず、自明視しつつそれらと交渉し合っている態度のことである。平凡な日常生活を

送っている限り、われわれは世界や事物がなぜ存在するのか、あるいはその存在とは何なのか、などといったことについて問うことはない。それらはいつもすでにそこにあるものとしての認識や行動の前提となっており、あらためてその存在根拠を問うなどということはないわけである(山口 1982：76)。

現象学は世界とのこうした馴れ合いを断ち切って、真の＜存在との近さ＞を回復することをめざすのである。そのために必要とされる方法的手続きが＜現象学的還元＞あるいは＜現象学的エポケー＞と呼ばれるものである。(中略)こうして、現象学は自然的態度に伴う一切のドクサ、先入見を退け、既知なるもの、自明なるものをいったん＜括弧に入れ＞、あらわれるがままの事象そのものへとまなざしを向けていこうとする。こうしたラディカルな視座の転換によって、これまでの世界との親和性はうち破られ、自明とされてきたものが問いに値するものへと変わるのである(山口 1982：79)。

ところで、こうした現象学的還元を徹底化していったとしても、なおかつそこにはそれ以上還元しえない何ものかが残る。それはこの還元をやっている当の主体そのものである。しかしこの主体は経験的な自我ではない。なぜなら、経験的自我は素朴な世界信念にのめりこんでいる非反省的な自我であり、それ自体が＜括弧に入れ＞られるべき対象だからである。この経験的自我をも括弧に入れる還元の＜残余＞としての自我、これが＜超越論的主観性＞あるいは＜純粋意識＞と呼ばれるものである(山口 1982：80)。

Schutz の考え方は、「あらゆる社会科学は思考と行為の間主観性を自明なこととしてとらえ、他の人間が存在すること、人が人に対して行為すること、シンボルと記号によるコミュニケーションが可能であること、社会集団や制度や法体系や経済体系などがわれわれの生活世界において不可欠の要素であること、生活世界が固有の歴史と、時間・空間に対する独自の関係をもつこと、などの現象は自明なこととして想定できるというものである」(Schutz 1970：5)。すなわち、社会的存在である人間は言語などのコミュニケーション体系に基づいて他者の意識に近づくことが可能であり、それによって私は他者の行為を理解でき、他者もまた私の行為を理解でき、人間によって作られた社会的対象についても理解できるとするものである(Schutz 1970：5)。このような考えのもと、Schutz は「私の日常生活の世界は、決して私だけの私的な世界ではなく、はじめから間主観的な世界である。それは、私が仲間の人間と共有している世界、他者によって経験され解釈される世界、つまりわれわれすべてに共通な世界である」(Schutz 1970：147)と述べている。この共通の世界は互いの理解によって成り立っており、そこでの社会的行為は「他我の身体的存在のみならず、私が自己の行為によって引き起こせると期待している他者の行為にも方向づけられており、したがって、そうした他者の反応が私の行為の目的動機となっている。こうした間主観的な動機連関があらゆる社会関係の原型」(Schutz 1970：172)となっているのである。

こうした議論を西原(1998 : 50)は、Schutz は超越論的主観性という立場に立つことなく、我々関係の先与性を前提として日常的な生活世界にいる人々における間主観性を、つまり人々のコミュニケーションの可能性の議論を出発点にして、そこから他我認識及び他者理解の問題に対峙しようとしていると述べる。そして Schutz の現象学的社会学を、我々という基底関係を中心とする間主観性論に基づく間主観性の社会学であると称している(西原 1998 : 53)。Schutz が説く間主観性は、共通で客観的な世界の構成は「我々関係」を前提とする自他のコミュニケーションの可能性に基礎をおくものであり、現象学で問われる超越論的主観性の間ではコミュニケーションは不可能であるとする(西原 1998 : 50)。まさに、現象学が世界の括弧入れの上に成立するとすれば、経験科学としての社会学はその括弧のとりはずしの上に成立するのであり、この両者を直接結びつけることは困難であると指摘できる(山口 1982 : 85)[6)]。

3-2　Wiley が説く間主観性概念と Weick 理論

Wiley(1988)は、主体との関係にもとづいたレベル概念という考え方を導入して、社会学における問題の分析に取り組んだ。そのレベルとは、内主観性、間主観性、集主観性そして超主観性と称する 4 つである(Wiley 1988 : 256-259)。それぞれのレベルがもつ特徴は以下のとおりである(Weick 1995 : 96-98)。

内主観性・・・自我が“私”を意味する個人的な思考、感情、意図にもとづくものである。

間主観性・・・二人以上の会話による思考や感情、意図の統合に伴い、自我が“われわれ”に移行し、間主観的意味が現出する。間主観性が感じられるフレーズとしては、相互作用、確信、価値観、コミュニケーション、イノベーション、創造性などが挙げられる。

集主観性・・・相互作用が社会構造ないし集合構造へと綜合されて一段上のレベルに移行することである。間主観的相互作用のレベルを超えると、具体的で個性化された自我は背後に退いて集主観性へと移行する。集主観性を示すフレーズとしては、安定、コントロール、共有された理解、集合的などの言葉がある。

超主観性・・・文化に相当するもので、シンボリックなリアリティのレベルである。

このうち、間主観性段階の特性としては Blumer の“連携的行為”や Schutz の“われわれ経験”[7)]との関連性が指摘できる(Wiley 1988 : 258)。また集主観性段階では、人々は互いに代替可能で、お互いの活動や意味を借用できる性質を有している(Weick 1995 : 98)。いわば、内主観性とは個人的な主観にもとづくレベルであり、そこから二人以上の人々の内主観性がコミュニケーションなどの相互作用によって交わり、間主観性が生まれる。さらに、複数の行為者間の相互作用が進展して、客観性をもった制度的・構造的な性格を帯びた共有意味世界の形成にまで

至った段階が集主観性といえる。このように Wiley が提示したレベル概念は「私・個人(内主観性)－われわれ・相互作用(間主観性)－社会構造(集主観性)－文化(超主観性)」という形に整理できる。

組織活動において重要なのは、間主観性と集主観性の間の移行である。Weick は Barley(1986)の医療現場における新技術が組織に及ぼす影響についての研究を引用して、双方の間の形態変化をとらえている(Weick 1995：97-98)。テクノロジーの安定期には反復性の強い標準的な活動が中心的であり、集主観性が支配的となる。しかし、医療現場に CT スキャナーといった新たな医療機器が導入されたときのように、テクノロジーが変化する際にはこれまでの体系、集主観性が充分に機能しないために不確実性が増大する。この際、発生した変化に対して新たな意味を付与する行為が試みられ、間主観性が前面に出てくる。しかし、人々が相互行為によって新しい意味を形成しようとするときには、従前の体系も参照される。この不確実性をコントロールするために行われる間主観性と集主観性の両者から構成される相互作用は、組織における意味形成(センスメーキング)の特徴となっている。

Weick(1995)は、Wiley の示した 4 つのレベル概念のうち、間主観性と集主観性の二つのレベルを組織化に関連づけて取り上げている。『センスメーキング イン オーガニゼーションズ』(Weick 1995)で Weick はセンスメーキング論を中心においた組織観を展開している[8)]。そこでは、組織とセンスメーキング・プロセスの素地は同じものであり、組織化とセンスメーキングの間には共通するところが多くあると述べて、「組織化とは、秩序を押しつけ、逸脱を減じ、単純化し、結びつけることであるが、人が意味を生み出そうとするするときにもそれと同じことが行われている」(Weick 1995：112)と論じている。そして、次のように組織化を定義している。

> 私としては、組織化を間主観性と集主観性の間を行き来する運動と捉えたい。組織化とは、生き生きとしたユニークな間主観的理解と、初期の間主観的構築に参加しなかった人が身につけ、維持し、拡大していく理解とが入り混じったものであると私は考えている(Weick 1995：98-99)。

間主観性を柔軟性や革新性をもつ概念として、そして集主観性を制度的かつ安定的な特性を有した概念としてとらえると、Weick が課題として挙げた組織の安定性と柔軟性の両立という観点にもとづく構造が見えてくる。またここに、個人的な主観を意味する内主観性レベルを加えることで、内主観性(イナクトメント的意味合いをもつ個人的行為)－間主観性(二人以上の行為者間の相互作用)－集主観性(組織、環境)という組織化過程との関連性も垣間見ることができる。

3-3　間主観性ならびに相互作用と Weick 組織化理論

これまで見てきたとおり、Weick は Schutz の現象学的社会学や Wiley のレベル概念をもとにして理論を構築しているので、間主観性という用語を使用していても、それが意味するものは現象学のそれとは異なっていると理解しなければならない。社会学の視点からは、現象学が意識や自我などの自己の主観性を問題にする主観主義的な学問であって、「それゆえ、現象学は人が他者とともに生活を営む社会的なものへの視点をはじめから欠いている」(西原 1998：97)という指摘がなされている。Weick が説く組織理論は、二人以上の人々の相互行為をその過程の中に組み込んでおり、その点で個人的意識のもとで事象や出来事に対峙する現象学とはアプローチが異なるものである。遠田は、このような Weick 理論をとらえて、「現象学的アプローチというかそれをさらに突き抜けた視点である」(遠田 1996：151)と称している。

筆者は前報(星井 2012)で、Berger and Luckmann(1966)らが論じる社会構成主義の視点から Weick 組織理論の理解を試み、両者の間の理論的関連性を読みといた。Berger and Luckmann(1966：82-104)は、人と人との相互作用にもとづく習慣化・類型化・制度化という概念を提示して、社会や組織の秩序形成について論考している。これらのことをふまえて、個人的行為－相互関係－制度的・規範的特性の側面から Weick(1979)、Wiley(1988)、Berger and Luckmann(1966)の各理論の関連性を表 1 にまとめた。Weick 組織化過程では、イナクトメント

表 1　Weick(1979)、Wiley(1988)、Berger and Luckmann(1966)の各理論の関連性

	個人的行為	相互関係	制度的･規範的特性
Weick(1979)	イナクトメント	相互連結行動	イナクトされた環境
Wiley(1988)	内主観性	間主観性	集主観性
Berger and Luckmann(1966)	習慣化	類型化	制度化
多義性の程度	大	←→	小
主観－客観	主観	←→	客観

から相互連結行動へ、そしてイナクトされた環境の形成へと移行する。これは、個人的行為から相互関係を経て組織的・制度的世界へと進展して、それに伴い多義性が削減されて客観性が確立していくプロセスを表しており、これら各理論の類似性が指摘できる。人々が共有する意味の構築や事象の構造化について、Strauss(1959：183)は次のように述べている。「出来事はすっかり把握されるには秩序化されなければならないということである。他の出来事のようにあらゆる人の人生の細部は観察者によって概念的に組織化され、パターン化され、それによって理解され、説明され、処理をされるだろう」。

Weick の組織化理論は、組織メンバー間の相互作用によって多義性を削減していくルール体系として定義づけられ、その中心的概念であるイナクトメントは、新たな環境を創出する積極的かつ能動的な意味形成の行為という側面が強調されてきた(Weick 1979)。また Weick(1995)では、組織化は間主観性と集主観性との間を行き来する運動であると定義されたが、そこに内主

観性的特性を有するイナクトメント過程を含めることによって組織化過程を循環運動としてとらえることが可能となり、組織の安定性と柔軟性の両立の実現性が見えてくる。行為者個々人によるイナクトメントをきっかけとして他者との間主観的な相互作用が始まり、そこから客観的性質をもつ集主観的な環境が構成される。その過程において、主観的で多義性の高い状況から多義性が削減されていき、組織メンバー同士が共有できる意味世界が形成されていく。そして、この共有意味世界が組織メンバーの行為やメンバー間の相互関係に影響を及ぼすのである(図 2)。

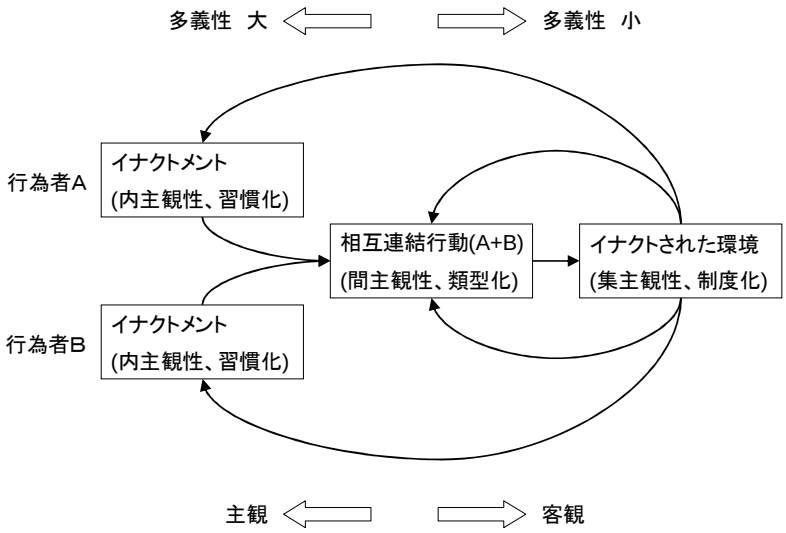

図 2　組織化過程の仮説モデル（筆者作成）

一度安定的に構築されて客観的性質をもった環境は、再び組織メンバーのイナクトメント行為によって新たな多義性が生み出され、ある種の不安定状況へと移行する。そして組織メンバー同士の関係にもとづく相互作用によって互いの意味解釈のすり合わせ、状況認識の共有化作業を続けていくことで再度、集主観性レベルに達して安定化が進み、客観的な社会的世界が構成される。組織メンバーは、これまでの組織活動によって保持された知識や経験をもとにして既存の外部環境に対する受動的な適応行為を進めると共に、イナクトメントという能動的な行為によって変化を生み出して自分たちが適応する環境を自ら創り出している。そして、その創出した環境に自らの思考や行為が拘束され、規制されるのである。安定性と柔軟性とが並存した組織の構築のためには、既往の外部環境への受動的な適応や過去の取り組みによって習得された知識を信頼しないことだけでは不可能である。常態的なイナクトメント行為によって現出した有意味なものを他者と連結させて、自らが適応すべき新たな社会的世界を構築するという取り組みを継続的に行うことが求められる。

4　おわりに

組織化過程の中心的要素であるイナクトメントは、組織と環境との関係において、組織メンバーにとっての有意味な環境を創り出すプロセスにあたるものである。Weick はイナクトメントを導出的意味形成と称しており(Weick 1979：206)、環境に能動的アプローチをして意味を見出す行為であると論じている。行為は思考に先行するものであり(Weick 1979：250)、本稿におけるこれまでの検討から、自己の行為は他者の存在や他者との相互作用、社会的世界における間主観的なコミュニケーション体系によって意味づけされ、規定されるものであり、さらにその自己の行為により他者の行為選択がなされ、社会的世界の一部分の構築がなされるものと理解することができる。

Weick による組織化過程を示した図 1 からわかるとおり、すべての要素に矢印があることから組織化の構成要素には明確な始点は存在しないといえる。客観的で不変的性格をもつ現実世界が所与のものとしてあらかじめ存在するのではなく、また、行為主体が適応すべき外部環境を自らすべて構築するわけでもない。このような一方的な受動的作用、もしくは能動的作用ではなく、両者の間を行き来する過程として組織化をとらえて、そこで行われる相互作用や形成された共有意味を検証することが Weick が説く組織論を理解する上で必要であろう。

組織について語る際に、何らかのメタファーを用いることがある。Wittgenstein は概念同士の関係性の変化について、河床の移動と水の流れをもとに説明しているが(Wittgenstein 1969：31-32，命題 96-97)、ここでは、この「河床の比喩」をよりどころにして、川をメタファーとして用いて組織現象の理解を試みる。例えば、我々が川の流れを見る時、それは既にある特定の場所を流れる一定の水の動きとして観察される。しかし、その水の流れを決定したのは、過去の水の流れによって土が削りとられた結果として水路が作られたからである。水の流れによって土が削られ水路が形成されて、ある特定の場所に水の流れができる。その水路によって水の流れが規制されて一定の方向づけがなされる。この水路は現在は所与のものとして観察されるが、水の流れの体系は常に動いており、変化するものであって、新たな水路が形成されることもありうる。ある一定の場所を流れる水の動きと、それを位置づけている水路の存在は相互関係によって形成されたものであり、両者に明確な区切りがあるものではない。両者の関係性が変化することによって水路が変わり、水の流れる場所が移動する可能性もある。水の動きによって作られた水路の存在が、いわば形成された組織環境にあたり、水の流れが人々の行為に相当する。こうした過去の経験や知識の積み重ねによって構成された体系は、人々の行為を統合し、規制すると共に、その行為にもとづく相互作用によって再びその伝統的な体系が流動的な状態に変化することもある。水の流れの体系は常に動いており、流れの変化に伴って両者の関係性や相互作用が影響を与えて新たな水の流れが形成されるなど、河床の移動もありうる。水の流れを規制する水路の構造体系だけを見るのではなく、また、流れる水の動きだけを観察す

るのではなく、両者の相互関係をとらえて、それにもとづく安定性と柔軟性の発現に着目することが重要である。

Weick は、組織の行為者の働きによって環境が生み出されるのであり、環境を創るのはそれ以外の何者でもないと述べ(Weick 1969 : 54)、組織が対応すべき環境を組織自らが創り上げていくことを主張している。しかし、組織自身によって創られるのは環境の一部であり、組織が能動的な働きを有しているとはいえ、組織自らが創り上げるのは環境の半分であると説く(Weick 2003：90)。Weick は一方的に行為者自身が外部環境を形成できるとは考えておらず、イナクトメントによって生み出された環境(イナクトされた環境)が行為者に及ぼす影響も想定している。Weick の組織化理論では、組織行為者の環境創出性にもとづく組織の柔軟性や創造性の形成を指摘する一方で、多義性の削減によって組織の安定性を実現するという二つの側面が論じられている。多義性の削減に伴って秩序だった安定的な構造化を進めていくという一面と、新たな意味形成の行為にもとづき行為主体が能動的に外部環境に働きかけを行い、新しい環境を創造するという二つの側面がある。この両者に関わっているのがイナクトメントである。

これまで Weick 組織理論は、認識論や解釈主義との関わりが指摘され、種々の検討がなされてきたが、組織メンバーの関係性、相互作用という視座から見つめ直すことによって、組織化過程の中心概念であるイナクトメントの重要性が認識され、組織の安定性と柔軟性の両立につながる可能性が示された。「イナクトメントは、有機体が外部環境と直接やりとりをする唯一の過程」(Weick 1979：170)であり、環境中の事象を囲い込んで働きかける機能と共に、自らが創り出した環境(イナクトされた環境)に拘束され、規制される性質をもっている。組織化を多義性の削減過程という一方向的なものとしてとらえるのではなく、組織を取り巻く環境の創造と、環境からの拘束・制約という両面をふまえて認識する必要がある。このような複眼的視点をもつことによって Weick が掲げた組織の安定性と柔軟性の両立という問題へのアプローチが見えてくるのではないかと思われる。このアプローチにおいても中心となるのがイナクトメントという考えである。イナクトメント概念の操作化を試み、観察可能なものとしてとらえることができれば、Weick 組織理論の実証的・定量的な分析の実現に近づくものと期待される。今後はこのような考えのもとで Weick 組織理論の実証・定量研究への展開を進める予定である。

＜注＞

1) Barnard(1938)は、人間の特性として物的、生物的、社会的要因の 3 つを挙げている。ここで示したのは社会的要因の定義である。そして、人間の行動は「現在の環境との関連から個人の現状を決定している」(Barnard 1938：14)これら 3 つの要因の結合の結果であると説明している。
2) Parsons(1951：32)は社会体系を分析する上での単位について、より巨視的な視点にもとづく分析においては、行為よりも高次の単位である“地位－役割”と呼ばれる単位を用いることが有効であると述べている。
3) 行為者 A と B が互いに依存し合う状況(二重相互作用)を一般的には相互作用と呼ぶが、Weick は一方向

の関係である相互作用と、双方向の関係である二重相互作用とを区別していることに注意が必要である。なお、この二重相互作用という言葉は、組織化の定義で述べられている相互連結行動という概念と同義である(Weick 1979：152)。そして、相互連結行動の規則的パターンによって確立される構造は、ある組織がどのように行動してどのように見えるかということを規定する構造、すなわち組織構造と同じであると論じている(Weick 1979：116)。さらに、相互連結行動の意味する点として重要なことは、第一に、Barnard の見解と同じく、組織は相互連結する人々ではなく相互連結する行動を基礎にしているということ(Weick 1979：123)、第二に、相互連結行動の実現にあたっては、目的の共有や全体の構造の把握などは必要なく、行為者相互の予測性であること(Weick 1979：129)が挙げられている。

4) 以下、Silverman(1970)の引用は、加護野(1988)ならびに Burrell and Morgan(1979)によるものである。

5) Husserl の現象学が説く他者論は、日常的で自然的な生活の中での人々の存在とその行為を所与のものとして出発するのではなく、他者の問題を私の個人的意識にもとづいた個別主観から出発をする超越論的な問題としてとらえた、という点に特徴がある。Husserl 現象学における間主観性とは、私と他人といった複数の主観どうしの関係性を意味するものではない。竹田(1989：130)は次のように述べている。「そうではなく、「間主観性」とは、“他我が＜私＞と同じ＜主観＞として存在し、かつこの「他我」も＜私＞と同じく唯一同一の世界の存在を確信しているはずだ”という＜私＞の確信を意味する。間主観性とは、＜私＞と＜他者＞の相互関係を言うのではなく、＜私＞の確信のある構造をさしているのである」。

6) 山口(1982)は、Schutz が超越論的な取り組みを排除し、自然的態度の構成現象学と呼ばれる考え方で他者理解に取り組んだことが Schutz の間主観性論に問題をもたらしていると指摘する。それは、他我の存在を自明のものとして生きる日常生活者の自然的態度を出発点にとり、私と他者とのわれわれ関係を原点として間主観性問題にアプローチしようとしているが、このわれわれ関係という仮定がどのようにして可能になるのかという点である(山口　1982：177-178)。そして、このことをもって、「世界の間主観的な構成を行為者間の相互志向関係によって基礎づけようとする試みは、そうした＜原点＞としての相互関係が前もって構成されたものとしてある間主観的な意味連関を＜いつもすでに＞前提とせざるをえない以上、どこかでその基礎づけの試みをうち切らねばならない」(山口　1982：182)とした上で、間主観的世界の構成の発端をたどり、それを再構成することは不可能であると論じている(山口　1982：183)。

7) Schutz は、われわれ経験と間主観性とのつながりについて、以下のように述べている。「［対面状況においては］われわれは分かたれない共通の環境、すなわち「われわれの環境」をもっている。「われわれ」の世界は、私や汝の私的世界ではなく、われわれの前に存在する一個の共通な間主観的世界である。こうした間主観的世界は対面関係、つまり、世界についての「われわれ」の共通な生きられた経験から構成されるものであり、間主観的世界はそこに根拠をもつのである」(Schutz 1970：187)。

8) このセンスメーキングを焦点とした論議においても、例えば Weick(1995)の pp.40-52 や pp.107-112 などのように、Weick はイナクトメントという概念を重要なものとして扱っている。

＜参考文献＞

Barley, S. (1986) “Technology as an occasion for structuring : Evidence from observations of CT scanners and the social order of radiology departments”, *Administrative Science Quarterly*, 31, pp.78-108.

Barnard, C.I. (1938) *The functions of the executive*, Harvard University Press (山本安次郎・田杉競・飯野春樹訳 (1968), 『新訳　経営者の役割』, ダイヤモンド社)

Berger, P.L. and Luckmann, T. (1966) *The social construction of reality*, Doubleday and Co.（山口節郎訳 (2003), 『現実の社会的構成』, 新曜社）

Blumer, H. (1969) *Symbolic interactionism : Perspective and method*, Prentice-Hall (後藤将之訳 (1991), 『シンボリック相互作用論 ーパースペクティブと方法ー』, 勁草書房)

Burrell, G. and Morgan, G. (1979) *Sociological paradigms and organizational analysis*, London:Heinemann (鎌田伸一・金井一頼・野中郁次郎訳 (1986), 『組織理論のパラダイム』, 千倉書房)

遠田雄志 編 (1996) 『組織の認識モード』, 税務経理協会

船津　衛 (1976) 『シンボリック相互作用論』, 恒星社厚生閣

浜渦辰二 (1995) 『フッサール間主観性の現象学』, 創文社

星井進介 (2012) 「社会構成主義が Weick 組織理論に与えた影響」, 『現代社会文化研究』, 第 54 号, pp.121-138.

加護野忠男 (1988) 『組織認識論』, 千倉書房

西原和久 (1998) 『意味の社会学』, 弘文堂

Parsons T. (1951) *The social system*, The Free Press (佐藤勉訳 (1974), 『Parsons　社会体系論』, 青木書店)

Schutz, A. (1932) *Der sinnhafte aufbau der sozialen welt, 2nd ed.*, Springer-Verlag, Wien, (1932, 1960), Suhrkamp, Frankfurt a M., (1974) (佐藤嘉一訳 (1982), 『社会的世界の意味構成』, 木鐸社)

Schutz, A. (1970) *On phenomenology and social relations*, (edited by H.R.Wagner) , The University of Chicago Press (森川眞規雄・浜日出夫訳 (1980), 『現象学的社会学』, 紀伊國屋書店)

Silverman, D. (1970) *The theory of organization*, London:Heinemann

Strauss, A. L. (1959) *Mirrors and masks : The search for identity*, Free Press (片桐雅隆監訳 (2001), 『鏡と仮面ーアイデンティティの社会心理学ー』, 世界思想社)

竹田青嗣 (1989) 『現象学入門』, 日本放送出版協会

Weick, K. E. (1969) *The social psychology of organizing*, Addison-Wesley (金児暁嗣訳 (1980), 『組織化の心理学』, 誠信書房)

Weick, K. E. (1979) *The social psychology of organizing, 2nd ed.*, Addison-Wesley (遠田雄志訳 (1997), 『組織化の社会心理学(第 2 版)』, 文眞堂)

Weick, K. E. (1995) *Sensemaking in organizations*, Sage (遠田雄志・西本直人訳 (2001),『センスメーキング イン オーガニゼーションズ』, 文眞堂)

Weick, K. E. (2003) “Sense and reliability”, *Harvard Business Review* 2003 April (ダイヤモンド・ハーバード・ビジネス・レビュー編集部訳 (2003), 「「不測の事態」の心理学」, 『ダイヤモンド・ハーバード・ビジネス・レビュー』2003 年 10 月号)

Wittgenstein, L. (1969) *Über Gewißheit*, Basil Blackwell (黒田亘訳 (1975), 『確実性の問題』, ウィトゲンシュタイン全集 9, 大修館書店)

Wiley, N. (1988) “The micro-macro problem in social theory”, *Sociological Theory*, 6, pp.254-261.

山口節郎 (1982) 『社会と意味』, 勁草書房

主指導教員（平松庸一准教授）、副指導教員（高山誠教授・長尾雅信准教授）